

視点

まちづくり

—日常における具体的経験の連関—

株式会社ジャパンエリアマネジメント
代表取締役社長

西本 千尋



私たちが幼いころというのは、きっと誰もがどんな著名な建築家やまちづくり屋も到底及ぶことの出来ない世界性を持っていて、たかだか1キロにも満たない通学路で友だちと個性を競い合うように、さまざまな遊びをつくり出すことができていました。その世界性というのは、徹底して具体的で、柔軟な変形力もあり、手をかけ続けることで、愛する輪郭というのを自然生成的につくれる、制約をも愉しんで乗り越えることが出来る、そんなものだったような気がします。それらは大人になった私たちがいかなる専門性を駆使し、多額の予算と時間と労力をかけたとしても、決して超えることのできないワクワクする経験の集積です。

ところで、大人になった私たちはいつのまにか通勤路でも散歩道でも不安な発見の方が多くなります。そしてついには「いかにもこの都市は中心を持っている。だが、その中心は空虚である」というような皮肉を持って都市の実在（不在）をことさらに強調したがるようになります。皮肉や逆説というのが、そこから想像力を媒介にワクワクする具体的希望や経験を誘うことが出来なければ意味がないなんてことは頭ではわかりながらも、残念ながら、私たちはそういう健康なイロニーとは長らくご無沙汰な世界の住人です。

実世界は「潤い溢れる」とか「豊かな」とか「にぎやかな」まちづくりといったスローガンを掲げながらも、私たちの日常に実在するのは、だれもない公園、だれもない商店街、だれもない美術館、だれも通らない道路であり、抽象的な諸要素は、その具現の過程において、とことん経験の蓄積とは無縁の形骸化された領域に落ちていきます。

さて、私たちが暮らす都市というのはこんな模様ですが、私たちの目指したいまちづくりとは、元来、そういうものたちに戦闘意識を抱いて、空虚さに対抗するために頑張ろう

● というものでも、逆に、いや、在ると実在を強調し、力を込めて表現したいのでもありません。

● むしろその逆で、都市の存在の「あるべき姿」にこだわらないこと、その始原の形、祖型を思い起こすために、似合わない経験を無理にしようと躍起になったりしないことを目標とします。

● 都市とはたとえば、二つとか五つとかの階級や地域の構成する沈黙の建造物ではない。都市とは、ひとりひとりの「尽きなく存在し」ようとする人間たちの、無数のひしめき合う個別性、行為や関係の還元不可能な絶対性の、密集したある連関の総体性である。

(見田宗介)

● ここに見田先生の有名な言葉を引きました。この「尽きなく存在し」ようとする人間たちとは、どういう状態を指すのだろうと考えてみると、それは、子どもたちが知らず知らずに、過去や現在から学び取った無数の個別性との相互的なかわりを持つことのできるように、自然で等身大な人間を指すのであろうと思います。決して、抽象的な「あるべき姿」の力説や強調によって、似合わない経験を強いられた姿ではなく。

● 本当に私たちが希求するものというのは、抽象的な「あるべき姿」の力説や強調の上に屹立するのではなく、日常生活の具体的な行為や関係の延長に自然と現れてくるものです。

● そんなまちの総体性を想像して、その連関のひとつとでも心が通じ合ったりする瞬間。それは驚異的に奇跡で、きっと美しい。私たちの営みはほんの小さなものですが、そういうことをひとつでも具体的経験として表現出来たらと思っています。

● まちづくりとはきっとそういうことだと想うからです。